〔特別講演〕

かびと共に40年－皮膚科医から基礎研究者へ

千葉大学名誉教授　宮　治　　誠

千葉大学医学部医学進学課程に入学した時，卒業後は開業し一市民としてのんびり人生を過ごしたいとの希望をもっていました。しかし卒業時の謝恩会の席で当時バドミントン部の顧問であられた整形外科の故鈴木次郎教授が私の左肩をポンと叩いて「宮治君，運動部の連中は余り勉強しないが卒業後一生懸命勉強し立派な業績をあげた人も多いよ」と言われたのです。その夜真剣に考え「よし，大学院に進学し４年間だけでも死に物狂いで勉強してやろう」と決心したのです。では大学院で何を研究したら良いのか，丁度ワトソン，クリックの分子生物学の勃興期で級友の多くは分子生物学の専攻を希望していました。しかし私は人が集まっている研究分野には拒絶反応を起こすのです。あれもダメ，これもダメと思案していく内に基礎研究として重要で，かつ医学分野の人がやっていない「かびの分野」があることに気が付いたのです。

しかし，かびの研究を本格的におこなっている教室はありません。それで水虫，タムシを扱っている皮膚科の大学院に入学したのです。しかし師匠がいませんので３ヶ月後「腐敗研究所」に出向しました。ここでも独学で研究を始めたのですが，２年経ってもテーマが決まりません。このテーマだと決めてもう一度調べてみるともう20年前，30年前に報告されていたのです。それが３年経つと10年か15年に縮まり，独自のテーマにたどり着いたのは大学院を卒業して２年経過していました。一方大学院３年を過ぎると皮膚科から優秀な後輩達が私の研究室に出向してきました。また大学側も貴重な人材だと少しは認めてくれたようで，まだ若いのに教授にしていただき，あれやこれやで研究所を止めるに止められなくなってしまったのです。

研究は後輩の西村先生とパートを組んで推進していきました。彼女がひらめた瞬間私がそれを展開していくというスタイルで成功していったのです。その例の１つが「黒色酵母の系統発生」の研究です。これは当事世界的に議論されていた黒色酵母の分生子（胞子）形成機序を理論的に解析し，結論づけたもので（西村・宮治理論），菌学の分野で画期的な成果でした。

しかし事は順調に推移していったばかりではありません。1987年研究所に存亡の危機が訪れます。当事の中曽根総理は全国の研究組織の見直しを行い，不必要な研究機関を廃止することに決め，我々の研究所もその対象となってしまったのです。大学人というものはこうなるとまったく頼りになりません。ほとんどの教官は直ぐ諦め，身の振り方を考えはじめました。しかし私にはかび研究の芽をつんではいけないという使命感がありました。それで若輩ではありましたが教授会で「何が何でも私は残る」と啖呵を切ったのです。文部省も大学本部も予算の期限が迫っているので早くかたずけたいのですが私は絶対に引きませんでした。その間色々ありましたが最終的にかびの研究施設「真核微生物研究センター」を誕生させることが出来ました。スタッフも半分以上出ていってしまいましたが私には自信があったのです。丁度国際化の必要性が叫ばれ始めた頃で私はこの研究施設を「かびの国際的研究施設」にしてやろうと決めスタッフを積極的に海外に派遣しまた向こうの研究者を招聘し共同研究を推進していきました。それと同時に当時日本でほとんど行われていなかった国際シンポジウムを毎年開催したのです。これは大変なエネルギーを要求されましたが，事務官を含め職員一人一人に国際性という自覚をもたらしたと自負しています。またセンターのもう一つの目玉として世界的な規模での病原真菌の収集に努めました。かびは遺伝資源として極めて有用で，バイオの研究分野においてはその国が遺伝資源をどの位持っているかが一つの勝負になります。真菌医学研究センター（1997年に真核微生物研究センターから改組）が有利なのは

私達が必死で世界中から収集した自前の真菌（遺伝資源）を使って自由に研究出来ることです。現在真菌医学研究センターは世界の真菌研究の中心の一つになっており，日本の微生物保存機関の中心的存在になっています。

しかし順風満帆とはいかぬもので定年間際にまたまた深刻な問題が起こってきました。それは大学の「独立行政法人化」です。法人化されるとセンターの様な小さい組織は直ぐ波に洗われてしまいます。とにかく行動を起こさなければならないとセンター長と相談し千葉大発ベンチャー企業第一号，（株）ファーストラボラトリーズ，を設立しました。この企業が発展し少しでも真菌医学研究センターの発展に寄与出来れば，と念じる今日この頃です。